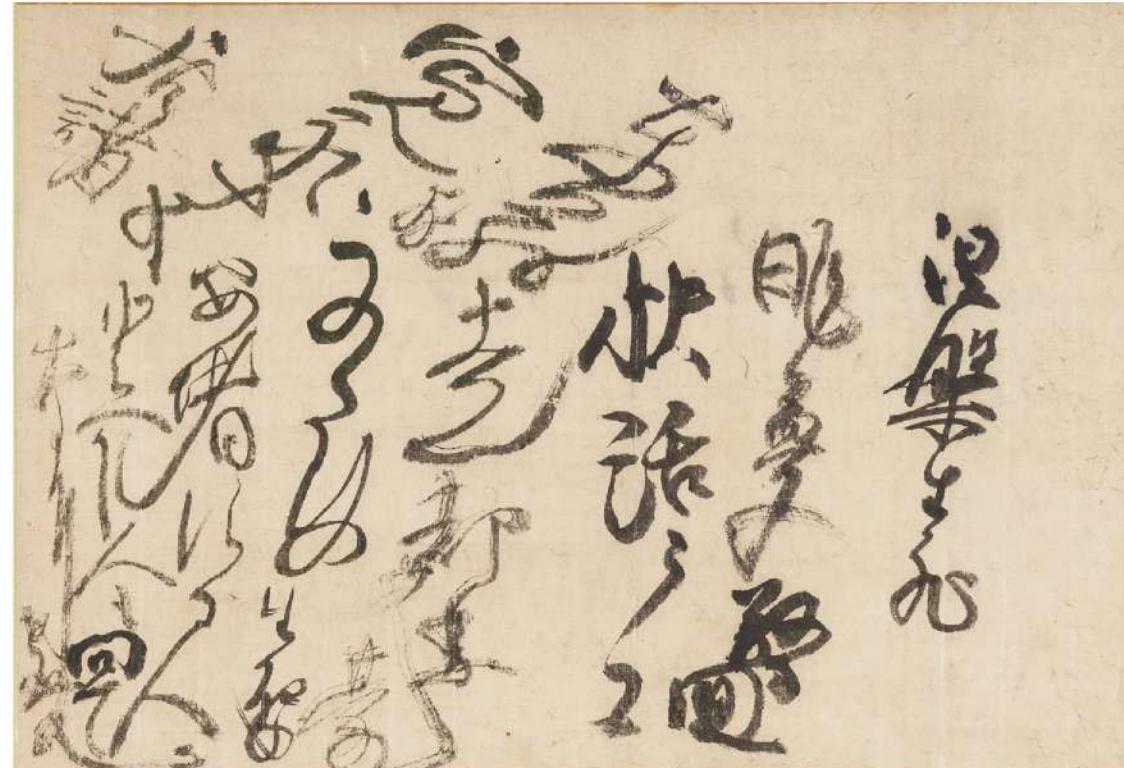


2、遺偈 烏丸光広

寛永十五年（一六三八）三九・六×五七・三cm 紙本墨書 法雲院所蔵

遺偈とは本来、禪僧が末期に書き残した辭世の偈頌のこと。遺誠偈頌の略称である。光広は、澤庵宗彭・一絲文守に帰依し、禪を修めているが、禪僧以外の人物が遺偈を残すことは極めて珍しい。

この遺偈は、寛永十五年七月十三日、光広臨終の際に書かれたもの。冒頭の「涅槃生死」から少しずつその筆が乱れ始め、四行目の「走却香台」まで書いた後、墨縁をし、更に末尾まで書こうとする筆の勢いからは、光広の末期の様子が思い浮かぶ。「一絲和尚語録」に拠ると、「香台を走却す」迄書き終えた後、一旦は化したもの、しばらくして復し、周囲に官位ならびに賀茂伝奏を辞官することを天皇に奏上するよう伝えたという。すると、「泰翁拝」から「居諸（日月の意）」までは、復して後に書かれたものかもしれない。いずれにせよ、氣迫溢れるその書は、さまざまな逸話を残した光広らしい最期を象徴するものである。



〔积文〕
涅槃生死
昨夢驚回
快活々々
走却香台
このたひの生死の
安堵する人に
とへかし人も問て
なにせむ

泰翁拝
寛永十五
居諸

3、烏丸光広肖像 一絲文守贊 土佐派画

寛永十七年（一六四〇）八七・二×五〇・一cm 絹本著色 法雲院所蔵



〔积文〕
和歌仙骨世無倫更究我宗転入真
利濟最強同事撰故忘來現宰官身
焉凡前輩相光広卿泰翁宗山者其名号法
名也寛永十有五曆之春秋病不起顧七月十三
日俄原兩檻之夢操觸拂紙自書偈曰涅槃
生死昨夢驚回快活々々走却香台駄然而
化悉勢信常見者嘵異臨其大變尽善如此豈非
見道超越履踐純粹之所致耶公自壯年泛
濫諸宗研般弘心殆乎三十余年后来与予執居中之
咬岩台無多年得之何其零碎從前知解先令參
狗子話凡經七年始有徹証乃作頌曰咬當無
字齒還亡端的咬時無尽歲即仮即心阻万里風吹
且示以本分到離公於是答証身在之臚翌
日被寄千書并和歌首其略云投機和歌昨
出現大恩垂手粉骨碎身未足酬自今以以後
駄迦達磨臨濟山出來亦不用相見又云
拈華微笑已一條紅線也九拜又九拜此書今留于庵
内其提詒諦也如此矣予當時愛他道拈華微
笑一条紅線固愛一偈答曰黃面拈華迦葉笑一条
紅線兩人牽且臺官人無意智自開大口恣風
顛公見向曰大愚公平昔下視天下禪林訶罵諸
方邪仰離其身以護法衛字為考之甚若身非
往古聖賢乘風世願輪再現宰官居士之身
者能如此君乃創大業於和歌請殊握手
聖朝者即出之後所謂天下蒼生口是碑者歎
豈待以僧徒質俚之言稱揚之耶 且將學伝
之勤百分之一記其術露云矣

光広の臨終の際の状況や、その人物評、また一絲文守との邂逅の様子が記されている。贊は「一絲和尚語録」に記載されているが、文章には多数の改変が見られる。

一絲文守が丹波法常寺の住持を務めていた頃に制作されたもので、後に法雲院に移されたもの。

贊には、光広の臨終の際の状況や、その人物評、また一絲文守との邂逅による遺像である。



〔耕闢〕
3.1×3.1cm



〔式絲〕
1.9×2.5cm



〔文守〕
2.1×2.4cm

寛永十有七年龍集庚辰之秋
大梅山法常寺比丘一絲叟文守贊

烏丸光広薨去から二年後の後、寛永十七年秋に、光広三回忌の前後に描かれたもので、光広が帰依した一絲文守が贊を添える。時に、一絲文守は大梅山法常寺にて住持を務めていた時で、贊を読む限り、一絲文守発願による遺像である。

贊には、光広の臨終の際の状況や、その人物評、また一絲文守との邂逅による遺像である。

一絲文守が丹波法常寺の住持を務めていた頃に制作されたもので、後に法雲院に移されたもの。